

令和七年度 一般入学試験問題「国語」

【試験上の注意答えはすべて解答用紙に記入すること】

◎次の文章を読んであとの問いに答えよ。

若い潑刺^{はつらつ}とした①かんじゆせいと疲れを知らない理解力であらゆることを知り、探求し、学び取ることは、まことにあなた方に課せられた、またそれ故にこそ②いざある^{たの}嬉しい征服ではないでしょうか。それとともに忘れてはならないのはあなた方の③きゆうしゅうした専攻学科の知識をただそれだけの④こりつしたものとしないで、人格的な纏まり^{まと}のある一つの立派な教養にまで押しひろげるように心掛くべきことだと信じます。

それではなにが教養かということに就いてはいろいろ複雑な規定を必要とするでしょう。しかし最も素朴な考え方をすれば、知識が単に知識として遊離^{そうりう}しないで総合的な調和ある形で人間と生活の中に結びつくことだといってよいだろうと思います。普通それとともに⑤対句のように並べられる趣味と非常に似通っているようで内容的に遠い距離がその間にあるのも、aそれはただ生活と⑥事物のほどうい味^{あじわ}い方を知ることであり、bこれはもつと根の深い積極性をもっているためであります。同時にまた趣味のある暮らし方をするということが、有関的な無駄な消費生活と見做^{みな}されるように、教養も尊敬の代りに軽蔑と反抗でA否定され兼ねない場合があります。遠くはフランス革命のあとに見出^{みいだ}された、近くはまたロシア革命の直後にもつとも過激に生じた現象によって、また一層手近い昭和五、六年を頂点として日本の社会にも氾濫したマルキシズムの洪水の中に見た例で、私たちはそれをはつきり知ることが出来ます。パンの問題がただ一つの社会的なむしろ人生的な関心であった当時の若い人人^{ひとびと}に取っては、教養などという言葉は虫の喰^くった古代語に過ぎない上に、寒暑を凌^{しの}げば足りる着物に⑦よけいなひだ飾りをつけたり、儀容を張ろうとして芝居の衣裳^{いしやう}めいた陣羽織や外袍^{トイガ}を着たりすると同じくらいにB異様に贅沢^{ぜいたく}で滑稽にさえ感じられたのです。そうして錦繡や宝石がブルジョアに専有された剰余価値を形象化したものであるように、教養もまた他の優雅な趣味とか高い徳操とかと⑧ひとしく、不当所得の拵^{しらべ}えあげたものに外ならないと考えようとしたのでした。Cこの氣早い断定も若い一図^{いちず}な憤激^{はんげき}の迸^{はな}りとして十分同情的に見得た人人も、彼らの否定が教養から知識にまで喰い込みそうな形勢を示した時には⑨きびしく反対しないではいられませんでした。あなた方の高等学校からの友達がD未練なく大学をやめたり、またやめさせられたりするのを見る度に母さんもひそかに重い溜息^{ためいき}をついた一人でした。逆巻く濁流に飛びこんで抜き手を切ろうとするには、泳ぐこと、飽くまで熟練していることとともに、それを⑩きそづける強い体力と、より強い不撓^{ふたう}な意志を必

受験番号

広島市立看護専門学校 第二看護学科

令和七年度 一般入学試験問題「国語」

【試験上の注意: 答えはすべて解答用紙に記入すること】

要とするのではないのでしょうか。単なる興奮や勝利感だけでは決してドーヴァーを乗り切ることは出来ないので。しかし高みの見物ということがこうした場合に良心的に苦しいものであるかは十分察しられます。またそれを思い悩まないほど主我的に若いころが庄し歪められているとすれば丑かえって怖ろしいことです。それにもかかわらず彼らの学業の抛棄に賛成することが出来なかったのは、人がそのおかれた位置を各自に守ることはいろいろな意味で非常に大切だと信じていたからでした。

(出典: 野上弥生子「ローマへ旅立つ息子に」(『野上弥生子随筆集』岩波文庫・一九九五)、

常用漢字表外及び、通行の文字遣いと異なる箇所には読み仮名を付している)

(注) 抜き手を切る……日本古来の泳法で泳ぐこと。

ドーヴァー……イギリスとフランスを隔てる海峡。

【試験上の注意答えはすべて解答用紙に記入すること】

問二 波線部 a、波線部 b の指し示す内容を、それぞれ本文中から抜き出さない。

ア	否定される可能性がある
ウ	否定も肯定もできない
イ	否定されるはずがない
エ	否定することは難しい

(三) 「滑稽にさえ」感じたのはなぜか。あなたの考えを述べなさい。

ア 知識を否定しようとする周囲の大人に反対されたから。
イ やる気や勢いだけでは世の中を渡り切ることができないと考えたから。
ウ 生活が苦しく、学業のような贅沢をする余裕が無かったから。
エ 知識をつけることが、有閑的で無駄なもののように思えたから。

ア 専門知識よりも、人格的な纏まりのある広い教養の方が立派である
イ 知識が多いというだけでは、教養があるとはいえない。
ウ 教養は、時と場合によつては軽蔑にも値する。
エ 教養が知識にまで喰い込んでしまうことには反対である。